episode.03

父から子へ、受け継がれる薩摩焼

話し手　鹿児島県薩摩焼協同組合 理事長｜苗代川焼･薩摩焼 窯元 15代
荒木（あらき） 秀樹（ひでき） さん（昭和34年11月1日生）

聞き手　神村学園高等部 2年

薩摩焼の歴史

戦国時代頃に焼き物が流行ったんですよね。でも、鹿児島には焼き物の技術がなかった、と。それで、安土桃山時代に島津の殿様によって連れてこられた朝鮮陶工の人達が、この美山（旧 苗代川）に住んで、苗代川焼が成立した。黒薩摩は黒い釉で仕上げてあって古くは庶民の日用品として使われてたんだけど、殿様は茶道に用いる白い焼き物を作ってくれというわけよね。白薩摩は白っぽい土を使って無色の釉で仕上げて、表面に貫入があらわれる。貫入ってのは陶磁器の釉の表面に焼き加減でできた細かなヒビのことね。貫入はたまたま出たものって言われてるけど私はそれは違うと思うのよね。あれは意図的に出さないと出ない。

土について

黒薩摩と白薩摩の土は違います。色がね、黒薩摩の土ってのは鉄分とかいろんな鉱物が入ってこげ茶色をしてる。だけど白薩摩は白い土のとこだけを持ってきたから白い色をしてる。でも土は土なんだよ。この白い土にも鉄分は入ってる。地球の一部だからね。同じ地球の土だからほぼ成分構成は変わらない。白薩摩の釉薬は灰とか長石とか、長石ってのはシラスの中にいっぱいあって、そういう天然のいろんなものを調合して作って、最初は白濁色とかだったんだけど、今はすごく精製されて綺麗に透明がかってる。かつてはそんな精製もしてなくて、とってきた土を手振るいして作ってたから濁ってたり黒いプツプツがあったりしたわけですよ。

跡継ぎになるきっかけ

うちのお母さんがね、ずっと言ってましたね。「あんたがやんなきゃダメだ。あなたがやるのよ。」って。期待に答えないといけないのよ。長男だし。でも、少しだけわがままをして大学では彫刻をやりました。素晴らしい先生にお会いして、だんだん僕も成長するわけよ。おかげで、今まで荒木幹二郎が一体何をしてたのかさっぱり分からなかったんだけど、うちの親父はこういうことをやってたんだとわかった。この人はここを目指してたんだ、こんな高いレベルで戦おうとしてたんだってのをわかった瞬間に、親父としてではなく先生として教えてほしいと思ったんですね。ただ単に美山に帰ってきて焼き物屋さんを継ぐということじゃなくて、荒木幹二郎という人に惚れ込んじゃったんですよ。

陶芸にかける想い

僕がものづくりとして白薩摩を作る職人として思うのは、自分の仕事に誇りを持ち自分の故郷に誇りを持つということ。郷土愛とかはもちろんなんだけど、物を作るということにおいての信念というのは、妥協しないとか、人真似をしないとか、ひたすら自分を追求するとかね。

とにかく職人は嘘はついちゃいかん。嘘をつけば焼き物に出るからね、作品は自分が出るから、自分という人間が。

聞き書きコラム

薩摩焼への想い

現代の名工｜苗代川焼･薩摩焼 窯元 14代　荒木 幹二郎

焼き物は理屈じゃないんですよ。感動の中に作る物ですから。これを作って何か我慢の結晶とか、人から良く思われようとか全くそんなのはない。一生懸命作るだけ。器を作る人間の全部が出てくるわけですよ。どういう風にしたら芸術的に優れた物に見えるかというそんな技術じゃない。作者の全て、人生の焼き物作り師としての経験もいろんな物の中から出てくるわけですよ。ただ何事をやるにも真面目で無心になってやりましたね。僕から焼き物を取ったら何もないです。